

英語なんか誰も喋って  
いない

シューズ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

スター・ウォーズの世界に転生したのだろうか？私はメイス・ウィンドウなのだろうか？フォース、ライトセイバー、ジェダイ、そんな言葉は無いが同じに思える意味の語句はあるし、星々を宇宙船で行き来する生活をしているが…

# 目次

プロローグ	1
自分のライトセイバーを作る	4
ライトセイバーでの戦い方、フォーム	7
I：シャイ   チヨ	10
ジェダイ騎士団の業務：護衛	13
ライトセイバー、フォームVI：ニマーン	16
業務：賞金首の追跡	19
ジェダイ聖堂にて、自主的な勉強	26
ランコア、ラスター、ヴァーパッド、e	32
業務：平和	35
ジェダイ・ナイトへ昇格	38
ドゥークー伯爵の、フォームII：マカシ	41
デパ・ピラバとの出会い	44
パダワンのデパ・ピラバ	48
フォームV：シエン	53
ヨーダの系譜 フォームIV：アタル	53
惑星ハウルン・コル	53
ザブラク種族のジェダイ・マスター、	53
イース・コス	53

	メイス・ウインドウの特別な才能	56		
	カイバー・クリスタル／アデガン・クリスタル	59		
	ジエダイ・マスター、ジエダイ評議会員になる	63		
	フォームⅢ：ソレス	68		
	フォームⅦ：ジュヨー	71		
	フォームⅦの応用：ヴァーパッド	75		
	ダース・モール			
78	パダワン　ダーシヤ・アサント			
	ダブル・ライトセーバー	82		前
	ダブル・ライトセーバー	87		後

# プロローグ

子供の頃、物心がつく前に一大国家の特殊機関に引き取られたそうだと。それから今まで常にその機関に所属していて、出世をし偉くなつた。出世といつても、その原因は権力争いを制したとか年を取つたとかではない。功績を挙げた事もあつたがそれもそこまで大きくはなく、出世の要因は、高潔でありまた善なるチカラを強く持つからだ。

物心がついて暫くして、ある妄想に囚われ始めた。その妄想は、妄想の中の概念で言う所の、前世の記憶、というものだ。前世で私が触れた娯楽の1つに映画というものがあり、その映画の1つにスター・ウォーズというシリーズがあつた。

この映画と、私の生活とに、共通点が年を経るごとに出てきている。

私が所属し続ける機関は、ジェダイ・オーダー…巨大国家は銀河共和国、善のチカラはフォース、こういう風に思えなくもない。

そして私自身は、メイス・ウィンドウ…。

不安。私のライトセイバーの動力源のクリスタルが紫色だつた事が、私の種族の寿命の数倍を生きた小さいグランドマスターの存在だけでははつきりしなかつた不安を明確に、強くした。

不安の感情は、私の所属機関では悪へと繋がるかと教えられる。善なるチカラの悪の側面へと変わる切っ掛けになり得る、と。

不安を抑える為には、スター・ウォーズの妄想を否定し忘れる、という手段が思いついた。妄想だと否定したい、という気持ちがきつとあった。青年になるまでは、この妄想を忘れようとしていた。

善なるチカラが強い聖地の1つに、特別な武器の動力源が採れる洞窟がある。

国の首都にある、機関の本部にて、私は物心がついてからある程度勉強や運動をしてそれから、宇宙船に乗ってその聖地がある惑星へと移動した。

共に学んだ仲間にも、教師にも、前世の記憶は相談できなかつた。人間という、今の自分と同じ種族が、その種族だけが、たった1つの惑星上で幾つも国を作って分かれている：差別的で野蛮な妄想だ。

人間に似た、人型の知的種族が多くても、人間から姿が遠いほどに壁を作ってしまうことは、その：色々と問題だと自分でも思えた。この態度は前世の記憶と関連していただろう。こういう差別的態度を取る同種族かつ同じ機関所属の者も1人知っていて、彼は優秀だったが：彼を尊敬し切るのは、やめておいた。

星に着いて、順番に洞窟に入っては青か緑の透き通った結晶を一方だけ1から3個ず

つ持ち帰ってきていた。

私の番になって、一人で洞窟に踏み入った。目を閉じて善なるチカラを感じていると、洞窟が眼前の岩肌に結晶を用意してくれた。フォーヌって可笑しなチカラだな、とその時思ったが、その思いは今でも持っている。

ところで、手に入れた結晶は、紫色だった。変だった。緑か青じゃないのか？

記録に残る他の色は橙、白、そして赤：悪のチカラを操る、今は滅んだ特別な敵が使った赤じゃない。それ以外には、紫の結晶が私に与えられた事への不安は誤魔化せなかった。

紫の意味は何だろうか？

洞窟から出ても、回答は得られなかった。

## 自分のライトセイバーを作る

色に大して意味なんかないんじゃないかな。気にはなるけど。青でも緑でも持ち主にチカラの扱い方に差はないっぽい。善のチカラの扱いの上手さで選ばれる機関内で高位のメンバー達の剣色の色は、青も緑もあつたし。

…神聖な武器の扱いの授業を担当するメンバー以外のは見た事が無いが。色によって位ごとのメンバーをわけてみたらなにか…そもそも紫は居ないんだつた。以前に居た事つてないのかな。機関には長い歴史があるらしいし、居てもよさそうだけど。

善のチカラに従つて、自ら自身の神聖な武器を作るのが伝統だ。この伝統がなければ私だけ紫のクリスタルが当たつて変に気になつたりしなくて良かったのに。不安や苛立ちはチカラの悪の側面に繋がるから抑えろつて教えられてるけど…。

神聖な武器は、その動力源の寶石が持ち主の善なるチカラを強めてくれるから、神聖なのだが、寶石単体でも（私の紫クリスタルも）別に武器に組み込まなくても私のチカラと共鳴してくれる。色の違いは性能の違いとは関係ないんだらう。なら、古代に滅んだ敵が使つていた赤いクリスタルも、別に私達の機関が使うクリスタルと差はないのは…？

自作する武器の形は、1人に1人ずつ付く主な師匠の武器と似せるのが通例だ。しかし、赤いクリスタルについて議論した時に冷たい対応をされた私は、あまり気がすすまなかった。

だいたい、自らを担当する師匠以外からも学ぶことはできる。師匠の同格や格上、格下であつてさえ私より凄い。それに、先人達の記録も、装置になつてまとめられている。記録の閲覧制限はあるけど。

そもそも、チカラに導かれて武器を設計することになつてはいるのだが…作る神聖武器の歴史を調べたら、これは発明されたもので、チカラと設計には関連が微妙に思える。武器そのものは、チカラと密接したものだ。が、柄だけが実体で刃はエネルギー体である現在の剣は、エネルギー弾を撃つ銃の普及によつて、全体が実体の剣から移行したもののらしい。後付けなのだ。

ところで…刃の部分も実体の剣を作つてみたい。現在では見た事がある者は居ないのではないか？こつそり自作した機関所属者が居てもおかしくは無い気がするが、どうなのだろうか。

自作する剣を2つにしようかな…実体剣の方はかさばるけど自分の部屋なら置いておけるだろうし、柄だけのやつ用の材料は余るだろうし、実行可能なんだよな…師匠には反対される気がするけど。

動力源のクリスタルは、少なくとも柄だけの方では取り外し可能だし。実体剣の作り方、具体的に知りたくなってきた。

クリスタルの色、エネルギー体には反映されるけど、実体剣なら関係ないだろう。：  
実体剣を持ち運んでいたら、使う時だけ紫の刃を出すよりも悪目立ちしそうだな。

# ライトセーバーでの戦い方、フォームI：シヤイ||チヨ

自分だけの神聖武器（誰にでも起動できるし多くの機関メンバーは私より使いこなせるだろうけど）を造り終えると、そろそろ神聖武器の使い方を新しく学ぶ頃だ。

神聖武器を振るう型は、7つの型とその派生型に体形だてられているが、好きな型を選んで身につけられる訳ではないのだ。私は今まで「始め」の型しか習えなかった。見るだけなら、訓練場で他の型を修練する機関所属者がいたけど。

機関の低位メンバー、その中でも下層である、仕事を与えられる前の私達は、「始め」の型しか教えてもらえない。武器を振るう練習法そのものが、「始め」の型だと思える。この型に収録された動作は、私には物足りなく感じる。少ない、と。…まあ自由度が高いとも言えるのか？「始め」の型に従いつつも私自身の理屈で身動きし易い。まだ他の型と比べた訳ではなかったが。

出力を弱めた半実体剣をただ振るだけで、型の必要性が分かった。出力が通常状態の神聖武器なら、刃のエネルギー体に触れた私の手足に切れ込みが出来ていた。体に接触しない様に余裕を持たせた振るう方が、要る。出来れば服にも触れない様な。

低威力の銃を装備したロボットを用いた訓練でも、「始め」の型の動作だけで全ての弾

を凌げるようになった。撃ってきた銃弾を思い通りの場所へと弾くのも、多分可能だった。低威力の銃からの弾はエネルギー体として弱過ぎて、刃に触れた段階で霧散してしまい、はつきりしないけど。

一番最初に習う【始め】の型を習熟していくだけでいいのかもしれないが、1人に1人付く師匠の得意とする型を新しく学ぶのが普通らしい。

機関の内部で中位から高位の所属者達が師匠のなり手となるが、大体は複数の型を修めているので師匠から学ぶ型もある程度選べる。

私はどの型を使いたいか、曖昧だ。

【第二の型】【決闘】が良い。私は高位メンバーに習いたい」

「まだ師匠は割り振られてないだろ？」

「師匠達に、私達が割り振られるんだらう」

「…【決闘】を研究している強い中位メンバーが居るから言ったのか？」

「そうなのか？知らなかった」

「どうなんだ？」

邪推だらう。

「中位では弟子を選べない筈だ」

私は口を挟んだ。

「高位の方に選んでももらいたいな。名譽なことだ」

「優秀な中位の人達に当たりたい。それでも誇らしいだろう？」

「どこがだ？」

「機関の最上層部から一定の評価をされたということじゃないか」

「師匠と弟子の組み合わせは基本的にランダムじゃないのか？」

「そんなことはないだろう」

師匠は誰でもいいな。【始め】しか使えない機関所属者でも別に。

## ジェダイ騎士団の業務：護衛

師匠に付かされると、2人で国からの仕事に行かされるようになった。政治家の護衛とか。何事も無ければ武器のスイッチを押し紫の刃を出す事もしない。

というか、何事が起こる時は、チカラから警告が来る。直感だ。なんとなくではないハツキリした感覚。それに従って移動ルートを変えて、原因らしき悪に近いチカラが僅かに感じられる箇所に治安維持機構の誰かを送って、終わり。暗殺者とか犯罪者に対面すらしなかった。

後から顛末を聞いても、興味が持てない。

で、私の感情を読み取ってそれに気付いた師匠から、よくわからない注意を受けた。私は他者の感情を読み取るのは苦手だが、機関所属者は、それに限らずチカラを内包する者達は、感情にすぐ気付く。機関の高位メンバーである師匠なら尚更だ、私の感情が動いていない事が気になったらしい。

内包するチカラが強くチカラを操る素養を持ち、更には物心がついて居ないほどに幼い、この基本条件を満たして機関に所属できる人材は限られる。その1人である私は、悪のチカラに傾倒しないように小さい時から教育されたんだから、感情の起伏がなくて

もいいんじゃないのか？ 穏やかな善のチカラを扱うのに、私が向いてるといっただけじゃないのかな。

：前世の妄想が妄想でなければ機関所属の条件を満たしていないな。機関に所属し続けたいという強い思いはないけど、妄想だろう。機関の教えでは死ねばチカラと一体化するらしいし。：機関が死を推奨しないのは妙な気もするな。

師匠の話は聞き流していた。私に具体的に注意したいわけでもないようで、何と無く気になるだけらしい。チカラは直感も強化するから、何と無く、というのは重要なんだけど、直感によるものを論理的に説明できていなかった師匠の話、その内容自体は聞き流してよかったんじゃないだろうか、多分。

一定期間の経過で護衛が終わる度に本部に戻って、機関の意思決定をする一部の高位メンバー達に完了の連絡を入れる。護衛対象者達が暗殺者に狙われたらしい時でも、暗殺者と対決したでもない私と師匠には、直接会って報告するほどのことが無い。

次の仕事が命じられるまでは、本部で勉強だ。神聖な武器を用いた型の内の第六、師匠が使う〔合成〕を学んだり、機関の記録庫からテクニクに借りて閲覧したりだ。

自室でぼんやりしている時間が長い。結局私は刃部分が半実体でない古代の方は作れなかったけれども、自室に私物で鑑賞に耐える物なんて、自分の現代版の武器一つしかない。あー、現代の武器と言ったら銃が相応しいのか。というか古代から長く主流

であり続け、かつ一般に流通している武器は銃の筈だが、この機関内は例外らしい。チカラがあれば銃に神聖武器は対抗出来るから不要だと機関所属の私は所持すら出来ない。機関も戦闘用宇宙船には銃器も搭載してるのに。他は：例えば服は、着用するのは機関が配布するものだが私に拘りはないし、もし拘りがあったとしても機関が用意した服は意匠が統一された機関メンバーと示すものだから、これ以外は不要だろう。武器だけで特徴的だから服は別でもいいのか、支給品以外を纏うメンバーもいるけど。

で、自室で武器を持ってぼーっとしていると大体師匠が呼びに来る。光刃を出していないから訓練場に行けと注意されたりはしないが、変な顔をされる。別に師匠が来るのをチカラを通して感じ取ってスイッチから指を離したりはしていないし、師匠も武器をただ眺めていたと分かるだろう。師匠はそれが変だと感じたのだろうが。

記録庫から借りたものを見ている時か神聖武器の使用の型の訓練で疲れて横になっている時には来ないから、いつも武器を眺めていると思われるのだろう。どうでもいい誤解だ。

師匠が私の部屋に来る用事は、私へのチカラに関連した事の教授もしくは、仕事だ。

## ライトセイバー、フォームVI：ニマーン

ふゝ…実体剣を作るのに師匠に協力してもらえたら…

「師匠、第六の型の習得にはもう一本武器を用意した方がよいのでしょうか？」

「必要無いと思うけれども…集中しろ、チカラが薄くなっている」

そうか？うーん…

「すみません、師匠」

師匠が構えを解き、武器のスイッチから指を離して刃を消した。

「【合成】の派生に特殊な武器の使い方がありますが、そこまで習いたいのか？」

私も武器の刃を消し、紫色の刃が消えた柄から片手を放した。

機関の高位メンバーには幅広い記録の閲覧が許されるから、師匠に頼めれば古代の武

器製作方法が分かる確率が高い。ただし…神聖武器をもう一本、となろうと今は廃れた

実体剣である必要性は無い。

「…第六の型の派生型のみにあるのですか？この型自体には含まれていないと？」

神聖武器の刃を出して振っていい訓練場は無数にあり区切られてもいるが同じ場に

私と師匠以外にも機関メンバーが鍛錬をしていた。離れてはいたが。

「意識が散漫になつてゐるな、弟子よ」

「集中します、師匠」

相対する師匠に視線を戻した。

「疲れは感じるが動作に影響はないようだ。続けるか？修得を急いでも意味はないんだが」

第六の型【合成】は師匠の薦めとは言い切れないけれど、私が2つ目に修めようとしてゐる型だ。

機関の下位メンバーの多くが第一の型【始め】の次に修得する型だ。修得の負担が他の型より軽いから、交渉術などを学び易くなるらしい。修得に要する期間は長いそうだが、まあ、共通語以外の言語習得や、星や種族ごとの特異な礼儀作法の方が、紛争の仲裁といった機関の業務に役立つ。

実際、機関は軍じゃない。そもそも戦いの技を急いで磨いてもな…。まあ、神聖武器を扱うのはチカラの理解を深めるらしいけど、実感は微妙だ。

チカラの感知、操作は感覚的なものだ。神聖武器を振って闘うのもチカラに身を委ねながら感覚的に出来る。ただし、型に沿う事でより良い動きになつてゐる…。筈だ。【合成】に含まれる動き方は【始め】より圧倒的に多く、幅広い。この型を修めれば常に理想的な動きをし続けられるのではないだろうか。

第六の型は一〜五までを組み合わせて発展させた記録にあったので、私の所感はその正しいのだろう。第一の型より第六の型の方が強力そうだという感覚も。

強さを求め過ぎるのはチカラの悪の側に繋がると機関では戒めているし、必要が無くとも第二〜五の型も齧ってみる方が良いかな。

数が大きい型ほど強力になると機関では話されているけど、優劣は無いとも言おうし【合成】を通して強さに執着するかもとは気にしなくても平気だろうか。

でも、もし【合成】の次に修めるとしたらどれだろう。いや、【合成】は学ぶのに負担が軽い時間が掛かるのだった。型の中身が一杯だと急いで詰め込んでも大差ないだろう。次の型を今考えてもしょうがないけど…チカラの感知に没入して未来を垣間見してみようかな。

…あれ、もし未来の私の修得した型が分かったら、それに合わせて型を修めたり修めなかったりするのかわか、知った未来を変えようとせず受け容れろと機関で教えているし。それって私の判断がなくなるような…別にいいか。

## 業務：賞金首の追跡

護衛から始まった仕事は、何度か何事もなくなしてから、犯罪者を捕まえるものが入る様になった。国が犯罪者を生け捕りにするのに高額な賞金を懸けて、それでも捕まらないと、機関に話が来たりするらしい。

目撃情報があった所へ師匠と共に、機関所有の武装した一人乗りの宇宙船で移動すると、運が良ければその場所か同じ星系で見付かる。目的の犯罪者の移動先が辿れなくなつて仕事が果たせない事もあるが…。

私が対面した（というより、「できた」）犯罪者達は、銃で武装していた。砲身を備えた宇宙船から降りていけば、銃で武装していても取り押さえられる。宇宙船を撃墜したら生け捕りは無理だろうし、宇宙船を牽引する機能は私達の宇宙船の様な小型船には付けれないから、どこかの星に降りた所を捕まえるのだ。

まず話し掛けて対象の犯罪者か確認する、この時点で多くは銃口を向けて来る印象だ。周りに生物も知能のあるロボットも居ない場所に移動しようと誘う、機関所属者だと名乗る、そこまでしたら全員銃を撃つてくる。周りに対象者以外がいればその時点で漸く武器を出してスイッチを入れ、エネルギー弾を刃で受けて地面に向けてはじきなが

ら近付く。

チカラを使える上にエネルギー体の刃もあれば簡単だ（失敗する機関所属者もいるらしいけど）。そして銃だけを紫の刃で破壊し、投降するよう勧告する。師匠が部分的にか全てかやる事もあったが、私一人でも可能だと示してからは、一時的に師匠と別行動する事もあるようになった。

機関特有の神聖な武器を用いた型は、実用の面から言うと言の弾を弾く為だけに使われている。エネルギーの塊を刃の部分で受けると弾き返す。刃はエネルギー体だが半分実体のようなもので、弾を刃で受けても柄に衝撃が伝わるので、宇宙船に装備されるような大型の砲に対しては脅力が足らず避けるしかない。

善なるチカラによつて感覚を強化できる事が念頭に置かれている型は、そもそもチカラを使えない多くの存在にとつて戦闘でかなり有利だと実感していたが：私は機関所属者の中でもチカラに関する感覚が特に鋭いみたいで、型を極めていなくても実戦で強いらしい。

どの犯罪者と対面しても、何の脅威も感じず穏やかな気持ちのまま捕まえ続けた。銃が撃たれる瞬間ですら落ち着いていられた。

感情が動かないのは何故か、師匠はずつと気にしていたけど。

感情的になり易く特に危険だという悪のチカラと向き合う訓練も、機関本部で受けた

事はあるけれど……その場所は隔離されていて、私一人で機関の過去の敵の幻と向かい合っただけだった。その時も、武装していなかったけど落ち着いたままで、善のチカラを全身に纏い立ち続けていられた。幻が消えるまで。

……そもそも脅威を感じた事が無いのかもしれない。脅威に直面した上で扱うチカラが悪に寄らないのかを気にしていたのかも。

## ジエダイ聖堂にて、自主的な勉強

機関所属者として必要なものは、チカラに關する事柄が主だ。倫理観や神聖な武器の扱ひなどが、修めるのに時間をかける。下位から最高位まで、仕事とは別に取り組み続けることが機関では求められる。

で、これと仕事以外は、やらなくていい。食事、睡眠、記録の視聴しか私はやっていなかった。だが自主鍛錬をするべきだった。

例えば、早く下位から中位に昇格するためには自主鍛錬をするべきだった。：早く昇格したいとは思っていなかったが。機関では向上心は推奨も否定もされていなくて、ただ同じ下位メンバー達は昇格を望んでいた：多分。交流が殆どなかったから言い切れない。

向上心が薄くても咎められなかったが、勤勉さは善とのこと。で、ぼんやりしている時間を鍛錬に使おうかなと思つたのだ。師匠との鍛錬が前より楽に感じて来たし疲れていかなかったこともあるかも知れない。

何をするか？芸術作品を作ることや、チカラを用いた話術、そして神聖な武器を使う戦闘の為のスタイルの習熟を、チカラへの理解を深めるとして機関は推奨しているけど

：他にも共通語以外を習得したり、機械の扱いを更に学んだりという選択肢がある。

神聖武器と宇宙船の修理は、簡易的なもの以上を学ぼうかな。記録庫にはやり方を記したものがあろうし、師匠か機械弄りが得意なメンバーを師匠に紹介してもらって指導してもらおうのもありだろう。

ただ：チカラを感じて身を任せれば何でもなんと無く色々出来るから、私は大体それで乗り切ってきた。師匠に付く前のメンバー達をまとめて行われていた機械関係の授業の内容を、全て理解できているとは言いがたい。

でもチカラを使い直感でいけるかもな…。

仕事の合間に、本部へ帰ると師匠との鍛錬とは別に機械について学ぶ様にした。

まあ基礎知識すら無しだとさすがにチカラを使っても出来ないものは出来ないみだし（私は宇宙船の建造もロボットの製作も、やってみたが出来なかった）、ちゃんと身に着けるか。部品も道具も機械弄りが好きなメンバー達からいくらでも融通してもらえるみたいだしね。

：道具はチカラを使えば無くてもいけるし、最悪材料さえあれば宇宙船を自作できる、とかがゴールか？材料の採掘も、チカラで位置の感知と取り出しが出来るかな…加工は難しいよな…。

機械類の部品を置いてある本部内の地区に行くと、多くのメンバー達に会い、話し掛けられる。

神聖武器の製作は2回以上するメンバーはいないと思ひ込んでいたようだった。私は既に1本作っていて、あれ以降やる事などないと思っていたが、1人で自作の神聖武器を2本以上所持するメンバー達がいた。そんなに要るのか？要るとしても過去のメンバー達が残したものがいくらでもあるだろ。そう劣化しないらしいし。

聞きそびれたが、まあ、芸術作品として仕上げるメンバー達に聞かなくて正解だったのだろう。

ロボットの改造は、私はロボットを持っていなかったが面白そうだった。宇宙船自体を弄るのは機械に精通した高位メンバーでないと咎められるが、宇宙船に補佐用に繋げられる独立したロボットの改造は寧ろ推奨されるとか…。自分で持っているロボットなら、改造していいらしい。やっているメンバーは多いみたいだ。

宇宙船まではいかなくても、乗り物をいちから自作するメンバー達も居た。宇宙船も自作するメンバーも居るのかもしれない。

機械の修理、製造技術は極められない気がする。チカラに関する技能なら極められるとも思わないが、「合成」の型は今に高位メンバー達に届くという感覚がある。最高位メ

ンバーにも、多分。彼は高齢のせいかあまり型を見せる事がないが。

ランコア、ラスター、ヴァーパッド、etc.:

寧猛な獣を飼うという趣味がある。機関の外の話だ。機械弄りなら趣味として行うメンバーが結構多くいる印象だが…。機械に関する嗜好には共感出来なくもないけど。

国が指定した重犯罪者を捕らえる為に赴いた星で、犯罪者達を纏めるグループのボスが、私達が望む者の引き渡しと引き換えに見世物として戦って見せろ、と言ってくる時があり…。

もしかしてどこの星にも同じ奴が居るのかも、と思う事がある。ボスの種族が同じ場合だけでなく、違う時でも、『この前も会いましたっけ?』となる。

戦う相手は、ボスのペットや部下や戦闘用ロボット…ペットと言っても、愛玩用ではなくて、わざわざ危険性で有名な野生動物を捕まえて来させて、敵の処刑などに使うらしい。愛玩用のつもりかも知れないが。

見世物への参加を受諾しそこで死ぬメンバーも偶に居るらしいが…機関所属者だけが、上手くチカラを使うのだ。メンバー以外でもチカラへの感覚を持つ者はいるみたいだが、チカラの訓練は機関が独占しているようで、チカラを感じ取れない者達からすると、機関のメンバー達は特別な能力を持つ強力な戦士である。

神聖武器も機関がほぼ独占していて、機関所属者を殺して奪いたがる犯罪者達も多い。高く売れるそう。メンバー以外が使用すると、チカラなくては銃弾は弾けない上にメンバーが咎めに赴くので死蔵する事になるが。国の遠く外までは追わないらしいが、国の外縁部付近までなら高位メンバー達が派遣されかねない。

様々な星があり、固有の生物が居るが、私は星ごとの特徴として怪物どもを覚えてしまった。宇宙で特に危険な野生生物達は、チカラと神聖武器を持ってしても手こずり、それらについて本部の記録庫でどこの星が原産か調べたのだ。一部の星々とその出身者に対して偏見を持ってしまったかもしれない。前世の妄想が消えてない事を併せると、私は差別的なのだ。

チカラで自分自身を強化するより相手に働きかけて抑え込む方が有効な状況が多かった。知的種族やロボットが銃を向けてくる時は自己を強化するべきだが、そういう場合には不要だった神聖武器にチカラを流し刃を強化する技も、頑丈な怪物相手にはかなり役立った。機関で大して重視されない技能だ。エネルギー体の刃はほぼ何でも溶断できるし、銃弾は跳ね返せるから。それに簡単に出来るし。まあ、刃を強化しても武器を振り抜くのにかなり手応えがあるのもいたから、私は鍛錬する。

巨大な怪物相手だと刃を延ばす技能が欲しくなったが、師匠に聞いても知らないらしい。かと言ってチカラを用いた独自技能の開発は難しいらしい。まあそうだろうな、と

試さなくても思う。チカラに関する技能はそもそも修得自体が難しいと私も感じているし、機関の歴史に残っているが失伝した技も多いようだ。死者蘇生とかの再現出来ない伝説の業を含むが、誇張が入っているかも。

獣をチカラを用いて手懐ける技能は残っているが、特定種族にのみ手懐けられる怪物が数種あつたりと、機関内でも適性が求められる特殊技能らしい。人族には対応する怪物は居なかつた。探せば見付かるかも知れないが、そもそもこの技能を私は磨いてない。機関本部に飼育場があつたが、そこに居るのを相手に練習するべきだろうか。人など知的種族の精神に働きかけ説得する技能と類似しているように思えるが、それよりも使い手のかなり少ない難しい技らしいから私には身につけられないかもしれない。

怪物相手なら戦闘用宇宙船を操縦して吹き飛ばす方が遥かに楽だろう。そうする機会は今の所ないし、チカラに垣間見せられる未来にもそんな情景はないけど。

## 業務：平和

ロボットか生物が滞在できる星々の大部分が国に属している。という事になっていくけど、きぞん宇宙船で瞬間移動不能な星図外への、瞬間移動無しの調査行も機関は稀に行う。

私は参加してもいいと思っていた。

機関の重要な仕事として国内の紛争調停があり、師匠や他のメンバーと共に関わる様になってうんざりしている。幾つもの星々で内戦が起きかけている。こんな星図内から出てもいい気がする。中で長期間生活可能な仕様の中型〜大型宇宙船なら一生そこでも平気だろう。機関の訓練で精神の安定は得意になっているし。

星図内での、星図更新の為の調査があればそれでもいいのだが。

機関の理念は、チカラを研究する、チカラの均衡をとる。後者の、チカラの均衡をとる為に国を安定させようと仕事をしている。その上で内戦を未然に防ぎ続ける仕事は重要だが、嫌過ぎる。チカラに身を任せればどうにかなるでもない。紛争間際の星では悪の側面のチカラが広がっているし、善の側面のチカラが使い難い。

政治家や活動家との交渉、場合によっては彼ら彼女らの保持する武力との衝突。チカ

ラが使い難いと、交渉も戦闘も大変だ。純粹な話術、言語や礼儀作法の知識、それに素の反射神経や体力が高水準で必要なのだ。何より先読みの精度が低いと遣り難い。

戦闘用宇宙船同士の戦闘も、起こる事が他の仕事より多い。自分の肉体に内包するチカラの強さに頼る部分が大きくなる。感覚的に、機関最高位に比べれば私は大したことない。客観的には、チカラに関する体内の特定の微生物の量の多寡で潜在的な強弱が分かるが、私にはまだ伸びしろがあるらしい。私に近い微生物量のメンバーから感じられるチカラより、私から感じられるチカラは少し弱いらしい。チカラの限界は生まれつき決まっているようだから私は最高位には届かないだろう、今の最高位は長命種族で寿命まで人間の一生以上ある筈だし。

紛争調停の為には悪の面を扱えば楽だろうが、悪の面を抑えてチカラの均衡をとるのが目的なのだから、悪の側面の使用をするのはあべこべだ。機関ではそもそも禁止されている。悪のチカラと相対する訓練はあるが、危険過ぎるからと使用は許されない。研究もほぼ許されないが、高位メンバーになると、悪の側面を使う古代の敵の詳細の記録閲覧が可能になる。この既に滅んだ敵について、悪の側面を操る特に危険な集団だとしか知らない。

機関メンバーからも悪の側面に変わる者が出ないとも限らないが、古代の敵とは別物でありそれ程危険でもないと教わった。そういう者なら紛争調停を楽にこなせるのだ

ろうな。私の中にも悪の側面はあるのだろうか、もしあるなら……どうしようか。

## ジエダイ・ナイトへ昇格

私が触れてきた各種の仕事は機関が扱う全てを網羅してはいない、が。

ただひたすら仕事をこなしていくだけで下位から中位に上がるものだ。機関の意思決定部署に所属する最高位と高位メンバー達から承認を受けて、私は機関の中位メンバーになった。

仕事の達成率や取り組み方が機関での評価基準にちゃんと入っているのかは怪しいが、チカラに関する能力の高低だけが評価対象でも私は多分問題無いだろう。

中位メンバーには弟子を割り当てられるが、私は直ぐに弟子をとらされてはいない。仕事は機関所属者2人1組で基本行うから、弟子が居ないのでまだ師匠と一緒に行動している。師匠から学べる事は、学ぶかは別として、いくらでもあるだろうし、それに弟子が居てもちゃんと教えられるか不安なので、中位に上げられなくても良かったかなと思っている。

機関内で以前よりも敬意を払われている、筈だ。実感はないが。機械系の技能磨きの資材集めも、楽になった気はしない。機関外で通貨を払って集める方が多様な素材や部品が手に入ると聞くがそこまでする気は出ない。機関の備品に物足りなさは私には感

じられないし。

機関所属者というだけで国内外で一定の敬意は得られているらしいから、中位に上がる利点は無い気がする。機関内の地位は基本的に自分で申請するものじゃないのでどうしようもないけど。

どんな仕事をしたいか相変わらず聞かれないし、やった事のない仕事に関わる事は無いのかもしれない。本部の警備や記録庫の管理とか少しやってみたい。情報収集とか機関メンバーの候補を探したり機関の運営は余りやりたい気がしないけど、戦闘が起これないなら起こるものより良い気もするな。危険も薄くしか感じた事が無いし戦闘が苦手ではないのだが。

宇宙船の操縦技能よりも神聖武器を使う技能の方が私には伸ばし易いと最近気付いた。だから戦闘も、宇宙船同士の格闘はやや苦手かもしれない。それでもチカラを操る感覚のない者達には負ける感じはしないけれども。

神聖武器を振り回すのも心身を鍛える修行の1つとされているが、心身を磨くのは私はさほど得意だと感じられない。チカラに身を任せて適した動きを引き出すのは、自身自身の心身とは別物という感覚なのだ。

心身の鍛錬で高名らしい機関メンバーに話しかけてみるべきだろうか。おつくうだけど…。

神聖武器の動力の宝石、そこから引き出される半実体の刃は、チカラとの親和性が高いから、神聖武器に関連したチカラの技能が比較的楽でもおかしくない。楽な方に流れるのは怠慢で良くない事だろうな。型や刃の強化技能に注力するならもつと厳しく鍛え込むべきなのか…

## ドウークー伯爵の、フォームⅡ：マカシ

【決闘】の型は習おうと思わなくとも、師匠が付いた機関メンバーなら扱う事になる。神聖武器持ち同士で打ち合う鍛錬に、この第二の型は最適だと。神聖武器は機関が独占しているから実戦で必要無いので、鍛え込むメンバーはほぼ居ないが。

神聖武器の扱いに習熟する為にしか使えない型だが、触れる機会が多い。師匠が付く前でも全ての型は中位以上のメンバーから見せられる。この機会には師匠が付いた後でも参加出来るし、下位メンバーなら観に行くものだ。そもそも、神聖武器をぶつけ合うのは師匠相手に必ずやるし、下位や中位の親しいメンバーの間で神聖武器の使い方の上手さを競う事が普通だから、第二の型【決闘】に手を出すという手段を検討しがちと言えるだろう。

私は師匠とのある程度真剣な手合わせで神聖武器の刃を当てられてばかりだったから、鍛錬中の第六の型から使い易い動きを抽出したいと思っていた。なので、第六の型が第二の型から抽出して参考にした動きを軽く探した。目的が無くても自由時間には機関の記録を流し見ていたから簡単そうだと考えていたが、私にはよく分からなかった。

自分の感覚ではどんな動きでも神聖武器持ちの相手に対して使えるし、師匠は第六の型の修得は順調だと言うし、鍛錬を私にとって改善するには第二の型を使うべきだろう。

記録上の第二の型の見本を観て実際に動いてみた。

他にもやれる事がある。面倒くさいけど。中位メンバーにこの型の使い手として機関内で高名な方がいるので、彼の動きを訓練場に行って挨拶をしたり。しなくてもいいけど、しないのはどうかと思うし…。

「どうも、【決闘】の動きを見学されてもらって良かったです」  
会話も出来るようになったし手合わせも偶にするようになってしまった。

神聖武器をぶつけ合う状況の為の第二の型だ。チカラを扱える知的種族の一部のみが神聖武器を使いこなせるとされるから、第二の型は相手と先読みをしながら前提であり、闘いが長引く事と巧みなフェイントの使用が想定されているらしい。結果として力んで動かずに、優雅な身のこなしになる、と。優雅さに惹かれるかどうか。私は惹かれな

ないかな。  
大体第二の型の使い手なら全員が優雅に振る舞う訳ではないだろう。それに機関で

は礼儀作法の習得も必須だし：優雅さが重要とは、私にはなんとなくしっくりこない言い分だ。あくまでもなんとなくだが。

第六の型の修得と平行して第二の型の動きが身につけてきた気がする。第一の型よりも複雑で第六の型よりもまとまった印象を受けている。卓越した【決闘】の使い手に言わせればまだ先があるそうだが私は第二の型をこれ以上鍛錬しようとは思わない。そう言う彼にも師匠にも【合成】はもちろんのこと【始め】でも対抗出来たし。

【決闘】よりも【合成】の方が幅が広いから【決闘】がカバーしている範囲の外で勝負出来るし、【始め】なら【決闘】よりも動きが単純だから戦闘が長引けばより楽だ。【決闘】同士で打ち合うのでも粘れるようになったし、【決闘】はもういい。自分でももう使えてるしな。

## デパ・ビラバとの出会い

1人の仕事の帰り、宇宙船を操縦して星の大気圏から出て光速移動の為の計算に入っていると、恐怖に射抜かれた。…私の感情じゃないな。チカラを通して感情が伝わって来ていた。

明確な思考は読み取れない、ぼんやりとした中で泣きたいという感覚だけがくつきりとしている。感情が伝わって来た方向へ飛行してみるか。危険な状況の誰かが居るなら機関メンバーとして見捨てるべきではないだろう。未だ状況はよく分からないが見付けた、あそこからか。

2つの宇宙船が接したまま宇宙空間を漂っている。

あ、盗賊かよ。襲っている所を丁度見るとは…。

被害者ごと破壊するか、いや駄目だよなあ。盗賊側の船だけ破壊するのは可能だろうか。私の船は接舷して乗り込む用の造りじゃないし…空気遮断用のバリアがあるのみで開いている場所があった。盗賊の方の中型船には。

1人乗りの小型船だし飛び込めるな。そうするべきだ…。武装しているから外から破壊する方が楽なんだが…

敵船内に突っ込む。操縦席の覆いを上げ、狭い船内から飛び出す。腰のベルトに吊るしている神聖武器を手に取り、スイツチを入れて紫に輝く刃を出す。賊を片付けるぞー。

宇宙船についての知識も習うし、生物の気配に向かって船内を走る。通路上の閉まった扉は神聖武器で中心を大きく切り取り穴を開ける。銃を向けて来る奴に遭遇、弾を刃でそらす。立ち止まり、弾をそらしつつ機関所属の者だと名乗り武装解除を求め。賊だな。武装解除に応じないから、走り出す。近付いて浅く斬る。

奥に強いチカラを感じる。悪の側面には感じられないから、被害者のだな。まだ生きてるのが1体は居る、急がないと。

倒した奴に続いて現れた賊共に向けて撃った来た弾を跳ね返す。全ては思い通りの場所には弾けないか。チカラから第六の型「合成」の適した動きと先読みと反射神経の強化をより大きく引き出し、生き残りに接近して神聖武器で敵の装備と肉体を斬ってゆく。

12体殺してしまった。無抵抗ではなかったし武装もしていたが：生命が消えるのがチカラから伝わるのは気分が悪い。賊の生き残りは少ないし死に掛けばかりだ。放置して行くのは良くないが：

立ち止まる。小さい生物に銃を突き付けた奴が私に武器を捨てるとか色々と喚いて

いる。私を感じたのはあの小さいののチカラか。赤子だろう：親はもうこいつらに殺されているのかな。

足にチカラを集めて飛びつくか、チカラで直接相手の動きに干渉するか銃を奪うか。神聖武器をチカラでスイッチを押さえて刃を出したまま投げる方がいいか。確実に赤子を救える。投げた後に赤子をチカラで引き寄せよう。

神聖武器を投擲し赤子を引き寄せ両腕で柔らかく抱きとめた。成功だな。

：チカラによる直接的な干渉よりも神聖武器を通しての方が練度が高いのは改善した方がいいかな。敵が後1体きりじゃなければ立ち回りが上手くいかなかつたろうし、殺す事になった…。

## パダワンのデパ・ピラバ

大きなチカラを内包する赤子は、移民の両親が盗賊に殺されて身寄りがなかったのも、機関本部に連れ帰り下位メンバーにする事にした。赤子の親と盗賊達の宇宙船2隻を、一仕事をしたばかりの星に持って引き返し、その星の政府に渡した。生き残りの盗賊達の処遇を任せ、私の乗ってきた宇宙船は1人乗りで居住空間も無いので、その政府から私の宇宙船を積み込める中型船と人員を出してもらい国の首都の星へ運んでもらう。

機関本部で仕事の達成と赤子について報告する。盗賊達を傷つけ殆どの命を奪った事は問題視されたが、意思決定部の12体の高位メンバーの前で状況を説明すると注意を受けるだけで済んだ。そして、赤子を私の弟子にする気があるか確認された。師匠が最初から付いている下位メンバーは珍しいと思うけど：私がこの赤子の面倒を見るべきだろうな。内包するチカラが強いし中位には上がれるだろう。高位にも。：私が位を抜かされる可能性もあるのか：ちよつと嫌だな。

私の初弟子が決まった。私とは種族が違うが、人間とほぼ同じと考えていいようだ。性別は女の子ののだけだ。それに、彼女の妹が故郷の星に遺されていたとすぐ気付かなかったり負い目がある。

多少やりにくさはあるが、チカラに関する感覚をしつかり備えていて教えるのに支障は無い。機械知識や、礼儀作法に類する文化学や語学は私には教える自信がないが、まあ：あらゆる分野の基本は同世代の下位メンバーが纏まって高位メンバー達や最高位メンバーから授業を受けているし、私が教える必要性は薄いだろう。そもそもまだ幼い機関の教育が本格的に始まるまで少し猶予がある。物心がつくまでと短い。

私の師に相談してみるか。私の弟子と種族は違うが私とも違うし、女性だし、接し方の参考になるだろう。

自我の形成に合わせて行われるチカラに関する教育は、洗脳じみている様に思えてきた。私の弟子にちよくちよく会いに行く様になっているが、段々と穏やかさを始めとする好ましい性格へと矯正されていっている。仕事で取り締まったおかしな教義の狂信者達と本質的には大差が無いように思える。方向性が善いはずだから止めてはいないが：私が1対1で教える時期になれば彼女自身の気質を引き出して自由にさせたい。

神聖武器は私の弟子はまだ自前の物を造っていないので、出力を低く固定された神聖武器が貸し出されている。第一の型を教えられているが、私は第二の型と第六の型も軽く実演して見せている。他に師匠らしく教える事がないのだ。チカラについての教え

は最高位の方が担当しているし、付け加える様な知識はない。

機関で重要視されるチカラに関する事柄の中で、神聖武器の振るい方ぐらいしか教えられないのは拙い。機関の歴史などの知識は記録庫に行けば分かる事だし、実践が役立つもの、感覚が重大要素のものをもっと鍛えないといけない。

チカラに関する独自研究は高位メンバーになるとほぼ必須だ。型の追及や独自技能の開発や特定状況下のチカラについてや未来予想など、まだ中位の私には学べる事が多い。しかし中位だから触れられる知識に制限もある。通常まだ師匠が付く時期ではない私の弟子にも与えるべきでない知識はあるだろうし。

高い能力を望むのは抑えるべきだと言う。悪の側面につながりかねないから、と。しかし研鑽しないのも怠慢、悪だ。弟子に知識、技能を詰め込むのは控え目がいいのではないか。第一の型〔始め〕の先にある型を見せるくらいで。

彼女の同世代の他の下位メンバー達に師匠が付く時期まで、私は自己研鑽に努めないといけないか。怠いけども。

## フォームV：シエン

仕事をあまり割り振られなくなった。弟子の教育がひと段落つくまではこうなるらしいが、私はまだ弟子に時間をかける必要がないので、2人組で行動できていない他のメンバーを見付けければ仕事量は戻る筈だ。ただし仕事をしたとは思わない。怠けるのは良くないから、誰かに誘われれば受けて2人組になるか仕事の助っ人にはなろうと思うが、それまでは自己訓練をしよう。

国内の多様な星の環境や文化を次々に学び、機械知識・技術を蓄積していく。それほど強く印象には残っていないが、機関で重要視されるのはチカラに関するものだし改めようとせずともいい筈だ。

チカラについて、ほぼ感覚でしか分からない。チカラに関する感覚さえ一部の生物のみが持ち、同種族でも有無の差があり、更には感覚の鋭敏さにも個体差がある。私は鋭敏な方なのだろうか。チカラを用いた技能は、現存する全てにまでは適性が無いが、神聖武器を用いた戦闘法には適性が高めのような。型を一七の全て修めようとしてみるべきだろうか。1つの型を極めるのも、自分に合わせて改造するのも、複数の型を使い分けるのもメンバーそれぞれだが…。

【始め】、【合成】、【決闘】に続いて別の型を学んでみよう。【合成】については引き続き鍛え込むとして、番号の大きいものを選んでみる。

第七の型は修得に許可が必要で全ての型を学ばないといけないそうだ。第六の【合成】の型はもう身につけているし、第五の型を学んでみよう。

記録を見て動きを学んでいく。立体映像の見本を、修練場でなぞっていく。チカラから第五の型を引き出し、身を任せる。偶に手合わせを申し込まれば受けて第五の型を使ってみる。

第五の型は攻撃的だ。あまり機関の理念にそぐわない気がするが、仕事上で敵と生身で対峙した時は役立つ。護衛の際には使い辛く第六の型を使っているけど、銃弾を跳ね返して敵に当てるのは第五の型に向いている。

第三と第四の型から派生した型らしいが、【合成】の型とは似ていない。第五の型と似た動き方も第六の型には収録されているが、第五の型全体として力強いという特有の印象がある。第五の型の派生型には、更に力強い攻撃的な型もある。この派生型には第五

の型に身動きの素早さが加えられていたが、動きにやや無理が生じる印象だ。鍛え込んでいけば違うのだろうか。

強打や連続攻撃の動きが多くあるので、第六の型にも無くはないが、宇宙船や建物の隔壁の破壊には向いている。緊急的な移動時にはそうする機会がままあり、特に頑丈な材質や構造でも第五の型なら手早く破壊出来るので私の選択肢が広がった。私の弟子にも第五の型を薦めようかと思うぐらいだ。彼女の希望を優先するけど。

## ヨーダの系譜 フォームⅣ：アタル

第五の型を使って手合わせ相手の中位メンバー達や高位メンバーに勝てるようになっても未だに私の弟子は神聖武器を自作する時期ではなかった。第六の型を使った方が簡単に勝てるのは練度の差もあるだろうが私の向き不向きもあるのではないだろうか。

第五の型で相手の防御を崩すよりも第六の型で相手の苦手な立ち回りをする方が楽だし早い。第五の型をもっと磨き上げれば相手を探る時間を取らず力づくで終わらせられるかも知れないが……。型の性質としては第五の型の方が勝ちやすいように思える。ただ、勝ち負けに拘るのはチカラの悪の側面に繋がりがかねない。チカラのより深い理解、一体化こそが、機関が神聖武器を振るうのを推奨する題目だし：第五の型にかける時間を新しい型の修得に注ごうか。

学べるのは後は第三か第四の型の2つ。これらは第五の型の派生元らしいが：機関では別物として扱われている。

最高位メンバーの使う第四の型を学んでみよう。彼に教えを請えれば有意義だろうし。

記録庫で第四の型の動きを閲覧し、複数の記録を借りては返却し、修練場で動きをなぞる。チカラと繋がり動きを引き出すが、動作がとも大きいものでありがちだ。隙が多く感じる。最高位の方に助言を求められるな。序に私の弟子との接し方も聞いてみよう。最高位の方がまとめて教育に関わっている一休だし、彼は長い期間に渡って多くの弟子を育てているし。

最高位メンバーの教えは心構えに関する事が多い。具体性に欠ける気もするが、何度か第四の型を見せてはくれた。動きを彼独自に改造しているが真似できなくもない。移動速度・頻度を大幅に増すと隙が一切無いように見える。もつとも、彼は機関でも最大のチカラの強さを持つからこそ続けられる動きだとも思う。チカラによる肉体強化の負担が、私が真似るならば大きくなり過ぎるだろう。

最高位の方が紹介してくれた第四の型の使い手と主に手合わせをしてきたが：私の方が強くなると第四の型は急に力不足に感じられ始めた。

第四の型はチカラを用いた大跳躍などで大きく動き回り、牽制や威嚇に有用だ。しかし私のチカラによる先読みが第四の型の知識が増したことで精度が上がリ、その意味が無くなったようだ。動きが互いに分かっていても第一、第二、第五、第六の型なら第四の型よりも有効に使えるのに。

【始め】の型は決まった動きに付け加えられる自由度が高いし、【決闘】ならそもそも読み合いが前提になっている。

第五の型に至っては相手が動きが分かっているにもかかわらず、対応できない程に攻め立てる攻撃性が見せられるし。

【合成】に関しては動きが多様過ぎて読めないというものなので、特定状況下なら第四の型と同じだけでも。牽制や威嚇をしたいなら第四の型に似た動きになるし。

まあ、第四の型は銃弾に対しての守りに優れているらしいし、神聖武器を振るうメンバ―同士の手合わせで劣っていると決めつけはしない。実戦で第六の型では防ぎきれなかった事はないけど、鍛えて損はないだろう。

跳び回れない狭い場所では当然使い難いが、私の弟子が望むなら止めようとは思わない。第一の【始め】の型なら狭い場所でも問題なく使えるのだし。既に彼女は【始め】の型をそこそこ使いこなせているように見受けられるけど、同じ型を使い続けたいとは考えていないようだ。向いている型について聞かれたが：第三と第七の型以外ならどれでも私が教えられると言っている型がいいだろうけど、彼女に適した型がどれかは判らない。私が最も得意と言える型も無いし：どの型にも苦手意識も得意な感じも無い。第六の型が最も練度が高いけどかけた時間が最長だからだろうし、仕事でも状況によっては第五の型を使うし：第六の型の使用頻度が一番高いが。

私の弟子が神聖武器の動力源である特殊な宝石を採りに行くのはもう直ぐだから、少し焦る。本格的に弟子と向き合う時期が近づいて緊張もしている自覚をした。心を落ち着ける技能は機関では必修だしチカラを扱う上で必要だが、これを弟子に教えるなら知り合いになった心身の鍛錬で高名なメンバーに任せたいな。

## 惑星ハウルン・コル

私の弟子は様々な知識を手に入れた。但し知識に溺れて彼女自身の性質が顕れてこない。私に見えていないだけかもしれないけど……自分の神聖武器を手に入れる前の同期の機関所属者の中でも、特に優秀だと評価されているが私にはよくわからないし。

私と共に携わった仕事も、難易度が低いものが多かったけど彼女はやり切った。危険度はどれも変わらない、銃に撃たれて死ぬかもしれない仕事ばかりだったが、国の内外に普及している安価な銃でさえも命は奪われかねないのだから、機関に所属していなくても潜在的な危険度は大差ないだろう。機関の意思決定部が危険度や難易度をどう判断しているかは知らないけど、私の弟子は高めの評価を取っているのではないだろう。師匠の私としては彼女の性格が能力よりも気になっている。

とにかく、私の弟子は機関メンバーの基本装備である神聖武器を自作する事を無事に許された。課されたとも言える。それで彼女が神聖武器の動力源である特殊な宝石をチカラを用いて採取したりする間私は暇になる筈だったが、彼女が自力で神聖武器を作り上げるまで私の生まれ故郷に顔を出してくるよう意思決定部直々に命じられた。

物心がつく前に離れた星だから故郷についての記憶はなかった。本部の記録庫から

知識は得ていたのであまり行きたくない星でもなかったのだが、私が機関に引き取られた事情を鑑みると中位メンバーとなり弟子もとった私自身が挨拶に行くのは必然だろう。

私の出身の一族は全員がチカラを操れるらしく、一族の生活様式などの他の特殊性も調査しに赴いた機関の研究者達が、機関に幼児を任せて機関メンバーとして教育させてもらえないか頼んだらしい。

私が生まれた惑星は金属などを腐食させる微生物が昔から原生している環境のようで、この星が国に参加する前から住んでいた人間のグループは今でも機械文明の恩恵にさほど浸っていないようだ。この点だけでも私の出身の一族はやや珍しいと言えるだろう。チカラを用いて火山と森の中で狩猟生活を続けているらしい。これは極めて稀な特徴だ。宇宙を飛び回ってきても見た事がなかったし、記録庫でも同じ：少なくとも私は知らない。国の他の星からの移民達とその子孫の方は、腐食対策を施して宇宙港を整備し金属製の進んだ機械も使用している私の馴染み深い生活様式みたいだが。

特殊な一族から機関に差し出された唯一の者が私だ。憶えていないが。孤児なので厳しい一族の生活に耐えられないだろうから機関へと渡されたようだ。機関側も平和の維持の為といった題目を示したらしいし、機関自体の国内の評判も権力も高い。嫌われるのも仕事を通して多く経験しているけど。

私は、出身の一族に対してそれほど関心がなかったが、幼い孤児がいるなら機関で引

き取るのは可能だなと考

えが浮かんだ。機関に所属したい、させたいと思うだろうか。1人ならさせてもいいと思つた事はあるようだが。

意思決定部は私を見せる事で一族の幼子を誘致したいのだろうか。

1人乗りの小型宇宙船で帰郷し星の地上にある宇宙港に入る。あまり栄えてはいないが、瓦礫さえも困つて港全体に壁が張り巡らされてあり、それから出ているエネルギー反応が船の計器で分かる。腐食対策の1つだ、外からの宇宙船にはこの星の環境に合わせた護りがない。強い力場を張つて船体を覆えば腐食しない筈だけど、エネルギー消費が重いから長くは続けないものだ。港以外に宇宙船を下ろすのは難しい星だ。

機関所属者は国内で優遇を受けるので、身分を隠す仕事で来ている訳ではない今回は簡単に物事が進む。

少なくとも宇宙港内では進んだ。荷物検査は受けず、検疫も私が優先的に受けられた。神聖武器の腐食対策に表面にジェルを塗つて外気と遮断してあるし、他の機械は乗つてきた宇宙船内に置き去りだ。呼吸器や通信機器が無いのは拙いかもしれないが、電子通貨の現金化もしてあるしこの星の物を買うことはできる。

私の出身一族とはこの星と一族の生活様式上通信出来ないので、事前の約束なく会い

に行かないといけない。港の周りの街を歩き出す。

ここが私の故郷らしい。

先住民と移住民との間に差別意識がある。どちらも子孫に過ぎないから原因の当事者ではなさそうだ。原因があるならば。

私の出身一族の子供達を街で見つけ、虐めを受けていればチカラで虐めている側に働きかけて説得し、乞食をしていけば目を向けず通り過ぎる。助けた後しつこくついてくる中から望む者を案内人として森に踏み込んで行く。森は恐ろしいらしく街から出たのは3人だけだった。

森の中の野生生物達はチカラを用いても感知しづらかったが、神聖武器の刃やチカラの干渉は効いた。それでも子供3人を一族の大人達に出会うまで護り切るのは大変だった。【合成】の型の対応出来る状況の広範さに救われた：

生活の糧を森の恵みから得る先住民と、森を切り拓いていく移民との対立だと一族との交流で分かった。国が優遇しているのは移民だ。切った木を消費して薬などの製品を作り通商を行っているのは移民だから。：私には解決出来そうもない。

ただ：チカラを機関の蓄積した知識なく使うこの一族には悪の側面に傾いていく危

険性が機関メンバーよりも高いと思うが、今のところ高い能力で差別に屈さず、暴発もしていない。このまま本部に帰ってもいいだろう。現状を報告しないと。問題解決に送ってこられるだろう機関メンバー達には、客観性を保つ為に私は選ばれないだろうな  
：

楽はできるが気まずいな。

## ザブラク種族のジエダイ・マスター、イース・コス

私の弟子は緑色の半実体の刃を出せる神聖武器の自作に成功し、それを扱う為の第五の型〔攻性〕も今は身に付けている。チカラに関する他の技能も、それなりだ。〔攻性〕にも関係する、未来の出来事を感じ取ったり物体を触れずに動かしたり自身の肉体や神聖武器の刃を強化したり。新しい技能を身につけさせたというよりか元々のチカラに関する資質を伸ばした感じだ。私がそれほど得意ではない技能、過去の出来事を感じ取るとか他者の心に働きかけるとかも彼女に習得させてあげられた。チカラに関係しない機械弄りや語学や礼儀作法や文化学は自習に任せる面が大きかったが。

弟子の心身を鍛える手助けをしてもらうのを切っ掛けに、私と同じ中位メンバーだった角を頭部に生やす人型種族の男と親しくなったが、彼はすぐに高位メンバーに昇進し対等な付き合いは難しくなった。そもそも彼は心身を鍛え易い種族で私の弟子と同じ鍛え方をさせるのは無理があつたし。

「私達は友として対等なままだ」

そう言ってくれるのは少し嬉しいが…

「そもいかないでしょう。高位メンバーとなられたから、友情以上に敬意をはらうべ

きでしよう」

もともと彼の方が機関に長くいる先輩の1体ではあったが知識や技能に大差が無いので同じ中位メンバーという事もあり友人付き合いがし易かった。種族の違いはあったが、それを意識しなくても問題無く交流出来る程度の差しか無かったから、私の偏見を直す一助になるかもと当初思った事もある。

実際は、関節どころかそもそも手足の数が違う種族とは違い、彼は人間に近いのだ。苦痛への耐性や強い自制心を持ち易いという種族特性が彼にはあって彼の種族自体に羨望を感じるが、人型種族以外への偏見は残っている気がする。

結構揉めたのだが、変わらない友情の証としてお互いの神聖武器を交換する事で決着した。：機関の格言を多く引用した会話は好かない。

強い執着を抱く事はチカラの悪の側に繋がるから避けるべきとされるし、私は自分の神聖武器にも執着しないべきだが：私だけの紫色の刃は気に入っている。それでも手放すけど。

柄の部分の違い以外は実用面で差はないし、柄はどれでも大まかには円筒形だし、交換した緑の刃を出す神聖武器を私は使いこなせた。が、友達の方は柄の形状の差が気になり遣い難いらしい。長い間自分用に造った神聖武器を使い続けていたから違和感が強いのだろう。

仕事で支障が出るようならお互いに返した方がいいだろうけど、どうも彼は意思決定部の一員に選ばれるかもしれないらしく、仕事が今後割り振られなくなる可能性がある。意思決定部の高位メンバー達は、基本は本部に留まり続ける。会議の際に本部の最上階の部屋に全員が揃う為に首都の惑星どころか本部の建物自体から離れにくい。

本部内では、弟子の教育に高位メンバーに上がってからも、もし意思決定部に参加する事になっても協力してもらえ。ただ、成長した私の弟子は私ではなくて他の下位メンバー達と組んでの仕事も意思決定部から命じられるようになってきて、本部から離れる時間が長くなってきた。単独での仕事を任されて中位メンバーに上がるのもそう遠くはないだろう。

まあ、彼女はまだ学ぶべき事が多いが急いで詰め込もうとは思わない。ただ、彼女は神聖武器の新しい型を学びたいと言ってきたが、「攻性」は合わないと思うらしい。一定の段階まで修めてから学ぶ型を替えた方がいいと思うけど。同時に2つの型を学ばせるのはな…

## メイス・ウィンドウの特別な才能

何故か故郷の問題解決に私も赴く事になった。既にこの仕事に取り掛かっている機関メンバーが2名いるらしいが、救援を求めたらしい。金属という広範囲かつよく使われる素材が腐食していく環境下だから星の地上では通信の為に機器への腐食対策が望ましいと、意思決定部に報告してあるのに、通信が途絶えているらしい。で、近い時期にあの星へ行った事がある私が送られる、と。

仕事中に行方不明になる機関メンバーは中位までなら偶に出ているが…殉職は、記録庫でも長い間とても少ない。危険な仕事が多いのに。通信出来ないメンバー2人の内包するチカラが、意思決定部の高位メンバー達にも感じ取れないらしいから、珍しく殉職者が出た可能性が高い。私と弟子の2人を追加で送るだけでは充分でないと思うけど…

未来は狭い範囲の一瞬先以外はかなり曖昧にしか分からないけど、この仕事には危険を感じる。私が生まれた星での行方不明者についての出来事は、チカラの過去の動きを感じ取る事で、今回は機関所属者が関わっているからかなり正確に分かる筈。機関のメンバーの足取りは会話でも星に居る者達から探れるし、死んでいても見付けられるとは

思うが：

ま、不安はチカラの悪の面に繋がっていくらしいからチカラを使っても抑えておこう。

：不安にさせるのは望ましくないが私の弟子にも懸念は伝えておこう。機関メンバー2名が殺されたかもしれない場所に行くのだと。

チカラを使っても弱点、脆い部分を見抜くというのは難しい。しかし、私の故郷に到着して先住民と移住者との対立に関わっていくと、意識しなくてもチカラを通じて感じ取れる様になってきた。生活の仕方の相反を原因とした小競り合い自体の解決には役立たないが、決闘や狩りなどを通して強弱で優劣を決めたがる先住民側との交流は、楽になった。容易く挑んできた人々を負かせるから。チカラを扱える者達と生死をかけた対立をする経験は以前は無かったからか、別に欲しくも無かった技能を身に付けてしまった。

チカラを用いて過去を知る技能の方は劇的な変化はなく、行方不明のメンバーは2人もまだこの星での足取りがよく分からない。移住者側が殆どを占める点在する宇宙港とその周りの街を巡って移住者側の権力者達と交渉していたのは誰とも話さなくても分かったけれど、その場に行かないと過去は読み取りにくい上にはつきりとは

感じられないから、私と弟子は星の地上の行き来で時間がかかっている。

腐食から身を守りにくいし道も整備されていない森に踏み込むと歩くか走るしかなく更に時間がかかる。森の中では野生生物の危険な植物も動物もいるし火山も多くガスで呼吸が難しい場所も結構ある。チカラを操る先住民とも、森の中で決闘や競争させられるし：私の出身の一族は野蛮だ。少し前よりも野蛮になっている。

行方不明の機関メンバー達の交渉を引き継ぎ、武力による衝突をやめるように言っているが、森を切り拓く商業活動は停められないから、先住民側の散発的な反撃は心情的に止めにくい。移住者側の方も一部が先住民を惨殺しているし、知的種族の死者は先住民側の方が多い。

機械技術を使う方が有利なようだ。もう一方がチカラを使っても、まあ機関ほどチカラの知識は持っていないようだ。口伝は先住民にもあるが、結局チカラは感覚的にしか使えないし、素質があってもやはりチカラに関する技能は難しいようだ。

証拠は見付からないが、直感的には消えた機関メンバー2名は森で死んで死体は獣に食われたのだろう。持ち物とおぼしき呼吸器か通信機か通貨や情報を操作する端末、出来れば神聖武器を回収出来ればもう本部に戻りたい。弟子と遠くに離れず行動し続けてきたが、武力衝突はなくなったので、手分けして交渉と捜索を続けるべきかな。

## カイバー・クリスタル／アデガン・クリスタル

神聖武器の部品、動力源のチカラと呼応する宝石を合計5つと筒状を辛うじて保つ柄の残骸2つを持って本部へ帰還した。寶石以外は国で広く流通している物だが、消えた2名の機関メンバーの死を証明するには充分だろう。チカラを通じて所有者達の苦痛と死が感じ取れるから…

機関メンバーの死の原因はよく分からないし、そもそも私の出身の星は流通の要所でもないし。この仕事は危険得性ばかり高くて、あまり意義は高くないものだったかも。争いは一時的には抑え込めただけだし、チカラに関する資質を持つ私の出身一族に機関への好印象は与えられなかっただろう。争う両者のどちらにも公平に接するよう努めたが結局は自分達の能力を高めつつ武力で抑え付けた感じだし…

私の弟子は今回の仕事を通じて、チカラを用いた洗脳じみた話術と戦闘技術について大きく進歩したようだ。あまりいいことだと思えないが。彼女の発するチカラは穏やかなままだが、悪の側面にやや近付いてしまったのではないだろうか。

まあ、仕事の評価は意思決定部がするものだ。その評価が明らかにされない場合も多けれど、意思決定部の高位メンバー達の感情を読めば推測できる。

わざわざ意思決定部の部屋で報告をしたが、あまり喜ばしい感情は感じ取れない。私の弟子の補足も含めて、この高位メンバー12名なら起きた出来事はかなり正確に把握できただろうから、高位メンバー達の死んだ仲間を悼む気持ちや私の故郷の危険な状況への憂慮は当然だろう。

私達師弟の能力が高まった事への驚きと感心については、やや意外だな。チカラを使う一族が関わる案件だと知っていたのに。

「それでは、君は弟子が充分に能力を証明したと考えるかね」

急な問いだな……まさか、彼女を中位に昇格させるべきかもと考えているのか。中位に上がれば彼女は喜ぶだろうな。私はどうだったか憶えてないけど。：質問の意図をはっきりさせるか。機関の教えをはじめとする国中の多様な格言を使った会話はもういいだろう。

「中位メンバーとして認められるのであれば喜ばしいことでしょう。彼女の能力はそれなりにあると思います。その証明も、できているのでは」

「それは我々の判断だ」

聞いたのは貴方方意思決定部の中でも最高位メンバーなのに。私の弟子の中位メンバーへの昇格は先走った深読みだったのかな。

頷いて黙っておこう。

「その通り。しかし……」

「ふむ、まだ彼は中位だったな」

もう私には話してないし。聞かせてはいるけど。

「よし。では、試験を受けさせよう。相応しければ中位に昇格するだろう」

「賛同する」「わたしもだ」「ああ」「賛成」「賛成」「賛成」「賛成」「賛成」「賛成」

「賛成」

ふーん……

私と弟子は機関が採用している礼儀作法に則った形で退室した。

「私はこの神聖武器の残骸を保管庫の高位メンバーに見せに行くが、君は自由だ。休んだらどうだ」

疲れてるだろう。

「はい、師匠……いえ、やっぱり鍛錬をみてもらえませんか、あつもちろん保管庫に行つた後です」

中位になれるかもと気が急いでるのかな……そつとしとこう。

「じゃあ自室で待つてくれ。宝石を持っていいか許可を取つてみるつもりだ、暫く時間がかかるかも」

彼女が私の顔を見上げたまま首を傾げた。彼女の種族は本当に人間と似ているな。

仕草まで共通だ。

「もしかして神聖武器に付け足すつもりですか」

「そもそも私の神聖武器じゃないんだぞ。まあ確かにこっちの神聖武器と同じ緑の宝石だけだな、無理に動力源を増やしてエネルギー体の刃の出力を上げたいとは思わないよ。キミはやってみたいの」

不安定になって危険だろうし、チカラに導かれての設計でもなくなる。彼女にも分かっていだろうから言わないけど。

「…いいえ。では、どうしてです」

「新しく神聖武器を造ろうかな、と。宝石が3つあれば出力の調整をしやすいのができるし。まあ今なら宝石2つでもちゃんと造れると思うから、第六の型の派生型を使ってみたいならキミに3つ渡すよ。2人で見付けたものだし、私に認められるならキミにも所有権は与えられる」

神聖武器の管理は機関が厳しく行っているみたいだが、機関内ならそうでもないだろう。古代のメンバーの神聖武器の持ち出しは機関メンバーでも制限はあるみたいだけど。

宝石以外に、使える部品あるかな。腐食しきつてはいないようにも見えるんだけどな。

## ジエダイ・マスター、ジエダイ評議会員になる

持ち主の中のチカラと共鳴する宝石5つとまだ使える部品は私達に所有が認められたが、私の弟子は中位メンバーへの昇格試験に行く前に神聖武器を造り終えられなかった。私が残りを仕上げといてもいいとは思うが、機関では自分の神聖武器は自分自身で作り上げるものとしている。どのメンバーも私の知る限り使用部品の素材を、採掘や精製から始める訳ではないのだから、核である宝石の入手以外は面倒な組み立ても自力でなくともよさそうなものだ。まあ弟子の造りかけは放っておいて自分の新しい神聖武器を完成させるか。

チカラに従って造り終わると、初めの紫色の刃を出す方とは柄の細かい造形が違う。装飾は面倒だったがチカラの導くままに無心で仕上げただけど：

握り心地が友人の神聖武器とはかなり違うし、第六の型を練習室でなぞっていつでも取り回しが楽になっている。

私の本来の神聖武器よりも遣い易いだろうな。友人とお互いに返しあう事になったら、返ってくるのを造り直そうかな。宝石だけ今の中に入れ替えても宝石の形が少しでも違えば神聖武器は上手く起動しないものだし、あの唯一の紫の刃を楽に振るには造り直

すしかない。

…結構、思ったよりも、私は神聖武器に所有欲を強く抱いてるみたいだな…良くない事だろう。神聖武器を大切に扱うのは機関も推奨しているけども、チカラの悪の側面に近づく感覚がうつすらとある。

身に付ける神聖武器が2本になった後、私の弟子は中位メンバーとして意思決定部から認められた。

そこまではいいんだけど、意思決定部から召喚を受けた。元弟子が中位メンバーになった後に私から彼女の評価を聞きたいわけでもないだろうし、何か重要な仕事でも振られるのだろう。

気怠い。機関本部内の壁や床、行きかう機関所属者達の肉体や所持品の脆い一点がチカラを通して伝わってくるので、ただでさえ機関本部の居心地が悪くなっているのに、高位メンバーの中でも特に尊敬を集めている意思決定部の12名の肉体の脆い場所なんて何度も感じ取りたくなかった。

この能力を抑え込む必要を感じ始めた。故郷の星での仕事の間から今に至るまで、あんまり気にならなかつたのに。

「なにが気になっているのだ、『ウインドウ』？」

私の姓はウインドウじゃない。ウインドウという発音は、私の妄想に過ぎない。差別

的だ。人間至上主義者の楽園の世界：それどころか姓―

「どうしたかな」

しまった。

「すいません、『マスターがた』。お話に注意を払い直します」

なんだかいらつく…チカラが伝えてくる脆い箇所をどれも意識しないようにしよう。

「ふむ…再考の必要は」

「いや、話を聞いてからでよかろう。『ウインドウ』、なにに気を取られておる？」

理由を説明するべきか。心を感じ取る技能は高位メンバーの方が上手だし。

「はい、チカラによる新しい感覚が今になって気に障っています」

高位メンバー達の多くがざわついた。いや、最高位メンバー以外は1、2名だけ動じ

ているように感じられないかな。

「うむ、上位のものじゃな？弱点を見抜く技能の」

まあ、そうなのかな。

「…はっ」

「それで何が気になるのだ」

顔を伏せたまま話してもそれぞれの脆い一点がどこかは伝わってくるな…

顔を動かし、直前の質問者に視線を合わせる。

「高位メンバー方の肉体の脆い箇所がどれも意識からうまく外せず、居心地が悪いので  
す」

「气まずい…」

「すいません」

…謝ってしまった。謝る所ではないのに…顔をまた伏せとこ…。

「貴重な才能だ」

「危険ではないのか」

「どこがだ」

「制御しきれていないようだ」

「…いや、必要はないじやろう、制御するのは」

「…ふむ…」

「なぜです、『マスター・ヨーダ』」

「彼は虐殺者ではなく、なりもしないだろう、未来においてもな。チカラは澄み切つてお  
る」

「…:…:では、改めて決定でいいかな」

「…賛成だ」「賛成」「賛成」「賛成」「賛成」「賛成」「賛成」「賛成」

「ああ、賛成じゃ、うむ。では、『マスター・ウィンドウ』。おぬしは高位メンバーとして

認められ、『カウンセシル・メンバー』として迎えられる」

ええ…：意思決定部に所属していない機関内で評判のいい高位メンバー達がいるの  
に…

「…光栄です」

「席につきたまえ」

意思決定部の仕事ってどんなだよ…いやまあ概要は知っているけど…

## フォームⅢ：ソレス

意思決定部の中で、私の発言権はないようなものだった。

まず、残りの生涯を全て意思決定部の仕事に捧げると誓う長期の意思決定部員として選ばれたのではなく、私の意思決定部員としての任期は区切られていた。それに他の意思決定部のメンバー達から私は大きくは尊敬を払われていない。意思決定部の中で良く聞き入れられるのは議長と最高位メンバーの意見だ。そもそも、私はあまり発言したいとも思っていないかった。話はちやんと聞こうとしているけども、仕事をしているというよりも知識を詰め込んでいる気分だ。前からだからだとだが続けている機関の蓄積する知識を学ぶ行程、そこから、記録庫から学ぶ知識を選ぶのを省かれたようなものだ。意思決定部の中での話し合いの記録を見られるようになったから最近の議事録を確認して、なぜ私が意思決定部員に選ばれたか大体分かった。

私が高位メンバーになる前に既に機関内で敬意を集めていた上に特に優れた実力を持つメンバー達も、候補になっていて、彼ら彼女らよりも特殊な能力を発現させた私が優先されたようだ。基本的に、意思決定部は特別な技能や能力を持つ高位メンバーをその構成員に選ぶので、意識せずとも、予め知っていなくとも生物や無機物の脆い一点を

感じ取れるようになった私が急に候補に挙がり、そのまま選ばれたようだ。

現在の意思決定部員の中で最高位メンバー以外では例えば、ひときわ神聖武器の型に長けていたり、チカラで他者の心に影響を与える技能が高かったり、種族的に苦痛に強かったり方向感覚が優れたりといった、特別さがあるようだ。最高位メンバーは長命種族なこともあるだろうがかなり前の議事録を見ないと意思決定部に入れた理由は分からなそうだ。まあ知らなくてもいいか。

意思決定部としての仕事、会議とかは本部で行われるから、通信で参加するのも許されてはいるけど、私はずっと首都の星で生活している。人体への吸収率が高いやつとか、栄養剤も暫く摂取していない。いわゆるちゃんとした食事を毎回食堂で摂り、排泄をトイレでしている。武装した宇宙船も乗ってない。

楽な生活をしている気がする。勿論、機関で最も権限の大きい意思決定部でのメンバー達への仕事の割り振りとかの重大な仕事は、気疲れするけど、身の危険を真剣には感じられていないと思う。危険な仕事に下位メンバー達を送ったりしているのに、これは試験の一種であるとか安全策も碌に講じなかったりする。ある程度未来をチカラによつて見通せるとはいえ、それで分かる未来は、場所や時間が遠ければ、正確でもはつきりともしてないのに。

意思決定部での話しを主導する最高位メンバーを含む、意思決定部の中の3名の長命

種族との価値観の違いは受け入れ難い。長期的な視野、思考を私は充分には持っていないのかも。私は現在をないがしろにしていけないだけの気もするのだが…

友達が育てた弟子や、私の元弟子の活躍を意思決定部に属していると直ぐに正確に知れるのは悪くないかも。

意思決定部に入ってから暫くして、神聖武器を用いた戦闘法の、第三の【対抗】の型を学び始めた。一区切りついたら、第七の【強猛】の型を学ぶ資格が得られるのでそれも学ぼうと思っている。

第三の型の動きは防御が主で、反撃の動きは短い。第一の型よりも発展しているが第六の型よりは発展した型ではない、はず。第六の型の方が優れている、けど…

## フォームVII：ジユヨー

全ての型を身に付けた、と言えるのではないか。型の指導を主な業務とするメンバーを第七の型「強猛」で攻めたてながら思う。全身にチカラが激しく絡みつき、不規則で激しく素早い、衝動的な動きを繰り返す、意識的に弱めに。本気でチカラに身を任せてこの型を遣うとこの相手では殺しそうだ。

「もういいでしょう、ありがとうございました」

構えを解き、声を掛ける。

「ええ、貴殿には、「強猛」を完全に、制御できています」

目前の相手は疲れが分かり易い。他種族でも知識はあるしチカラで探ればはつきりわかるけど、同じ人間だから呼吸の乱れから経験的に分かる。かなり疲れさせてしまった、もう少し早く切り上げるべきだったか。

「少し好戦的になっていたと思います」

「手加減、されていたでしょう。追い詰められた時に、悪の側面に、踏み込み過ぎてしまわないか、確認したかった、ですが」

追い詰められたら、か。死にそうになったらもっと強さを求めるかも。

「実戦ではこの型を使わないようにします」

「意思決定部のメンバーなら早々危険はないでしょうね」

記録でもこの型を使用して悪の側面に移ってしまった中位メンバーが昔多かったよ  
うだし、使用は控えよう。どうせ今は、単純な戦闘そのものは第四、五、六の型でも直  
ぐに終わらせられる。めんどくさいとは思わない。第七の型をもっと習熟するまでは  
然程差は出ないだろう。

機関メンバーとの手合わせの方は素早く終わらせたなら相手の為にならないだろうし  
：高位に上がってから手間だ、いや同じ高位でも意思決定部にいる間はやや格下扱い  
か。最高位メンバーや元弟子をはじめとした数名相手だとそもそも素早く終わらせら  
れはしないし、第七の型を身に付けても利点が無いな。

ああ、こんな考えは駄目だな。

：無心で善の側面のチカラに奉仕する、か。【強猛】で今までよりもよく窺えるチカラ  
の危険性、悪の側面のマズさから自分を守る方法論だよなあ、機関の教えって。チカラ  
による先見の発展系の予言とかも混ざってるけど。

：安全に悪の側面のチカラを利用できないかな。

善の側面のチカラは安定しているけど、【強猛】で使うチカラは不安定ながらもより強  
い、悪の側面に近い。【強猛】の安全性を高められれば、習得の制限が緩和し、機関メン

バーの殉職も減るんじゃないか。

ただ仕事をこなすだけでは怠慢かもしれない、せっかく意思決定部にいるから大きく機関全体に貢献できそうだし、【強猛】を研究して改善してみるか。元弟子と第七の型まで習得済みの高位メンバー達にも声を掛けて：

意思決定部にいると意外に殉職者が出る事に、死者の報告が来るたび今でも驚く。嫌な驚きだ。

機関メンバーは戦闘員として最上位の実力があり、外交官のように国で振る舞う、特権階級的な存在だ。各星の政府や有力者、大企業の有する戦力を超えているかもしれないが、やはり数が少ない。歴史的には最大級のメンバー数だけど、チカラの素養はやはり稀だし、素養があらうが機関に必ず所属するわけでもない。チカラの使用の訓練方法は機関が独占しているからチカラを悪用する者達でも高位メンバー数名がかりなら確実に抑えられる、それでもメンバーも殺されうる。時にはチカラが使えない相手にも。

まあ、戦闘機とかに乗っている相手には神聖武器だけではほぼ抗えない。チカラを用いれば戦闘機の操縦も相当出来るが、戦闘機を常に乗り回しはしないし。平和を望む機関だし。

神聖武器は武器としては弱い部類だよなあ。型とか、銃を使うなら要らないし。別に

機関で独占しなくても誰も実用品としては求めなさそう…

## フォームⅦの応用：ヴァーパツド

第七の型を少し改造は出来た、が、私が遣い易いだけの動きでしかないようだ。

機関の意思決定部で、従来の【強猛】より重い習得制限が課された。

「…改悪になってたのかな…」

「すまんのう、しかしかつての悲劇を繰り返しかねん」

聞こえてたか。いや、最高位メンバーには聞こえてなくとも感じ取られるか。

第七の型に習得制限が課せられたきっかけの一連の事件つて1200年以上前だろう。長命種でも生き残つてない。…彼の種族にとっては1・2世代に過ぎないか。今とは古代の状況は違い過ぎると思うが…長命種とは感覚が違うな。意思決定部の三分の一、4名は長命種だし…私の感覚の方が劣つてるのかもしれない。

「それでも、貴方の新しい型は記録庫に残されます。名称を考えておいて下さい」  
高位メンバー以外閲覧不可エリアにだろ…

【強猛】 よりも危険視されているから…

【残忍】、 にしておきます。使用も控えます」

「ふむ」

「そうか」

「…成程」

「彼なら使っても問題ないのでは」

「そうね、彼には御しやすい型のようすし」

「…そうじゃの」

「貴方は【残忍】の型を使ってもいいでしょうね」

私には危険性が低く思えるんだよな…

「…ありがとうございます」

私が作った新しい型か。第七の型の派生型扱いなのか…型と言えるほど収録された動きは多くないんだけど。

突進と連撃しかないし、もう研究開発も終わりだから他の型より対応出来る局面がかなり少ないままだ。

「次の議題に移ろう…」

習得制限が厳しすぎてごく一部の高位メンバーしか満たせない上に、実用性も低い。必要とされない技になつて…。

機関メンバーの死者も相変わらず偶に出てるな。下位メンバーや情報部がほぼ全て

だ。

それでも機関全体としてはかつてないほど大きい規模だけど。複数の星系にまたがる戦闘はなし、と。

：チカラの安定した状態と不安定な激しい状態が絶えず切り替わり続けるようにしないと【残忍】は使えない。

これってやっぱり、【強猛】よりチカラの悪の側面に踏み込んでいるのとは、ちよつと違うよな。

突進して連続攻撃を繰り返すのは、対象の弱い部分を楽に感じ取れる私には向いているのもあるけど、悪の側面に近付いたチカラは攻撃以外には使いにくいという理由もある。機関に国が任せる仕事は護衛や交渉が多く重要性も高いから：

：結局殆ど意味のない事にかなり長く時間をかけてたのか：

機関メンバー同士の神聖武器での手合わせで、楽をしたい時に使うだけになるか。高位メンバー相手限定で。私自身が出張するような仕事でも危険はもうほぼ感じないし。

ダース・モール

パダワン ダーシャ・アサント

機関本部についてる尖塔の上階の円柱状の部屋で、いつものように意思決定部の話し合いをする。部屋の側面はどこも透明な鉱物から造られた壁な上に、首都星の天気は国によつて機械で管理され今日も殆どの日と同じく晴れているので、常に見通しはいいのだが：重苦しい気分だ。

ここ暫く、国の中枢に緊張がはしっている。政治家達の護衛の仕事をするとかなりうんざりしてくる。

機関としても、国からの離脱を望む星系へ交渉の為送った高位メンバーと下位メンバーの師弟1組が惨殺されて首都の星へ死体が送り返された1件から不安と憂慮が蔓延し始めた。

国という多数の星系の連合体に罅が走ってきた。深く集中すれば、国からの離脱という思想は、国にとつての弱点だとチカラを通して伝わってくる。この感覚は私だけのものようだが。最高位メンバーがチカラと深く繋がって曖昧な未来のイメージを読み取ると、私と違う考えになるようだし。今の意思決定部で重視されているのは複数の星

系にまたがる何種もの犯罪組織や大企業の違法行為を咎めることだ。勿論、これらは重要な問題だ。

弱い部分を感じ取るのはかなり上手くなってきたと思う。国や機関という概念的なものでもどうすれば破壊できるか何となくでも分かるようになってきた。意思決定部内で序列は明確には決められていないけど、意思決定部のかじ取りを私が任せられたら、その逆の行動をすればいい。もしくは犯罪組織の弱点について破壊すればいい。ただ、以前破壊する為の提案が通った時、その犯罪組織は崩壊したが構成員は捉えきれなかった。その組織への致命的な行動は、組織崩壊の一連の流れを作る切っ掛けに過ぎなかった。分かっていたつもりだったが…

意思決定部では基本最高位メンバーの意見が優先される。しかし国が軍事行動をとるべきという一部政治家の動きへの評価は意見が割れている。国の要請なら軍事行動にも参加すべき、とか戦闘行為は機関の理念にそぐわない、とか。最高位メンバーが意見を保留していなくても割れるとはつきり感じられるほど、意思決定部メンバー達の信条がこの件についての面では対立している。

私の元弟子も高位メンバーに死者が出る直前に意思決定部に参加し、紫のクリスタルを内包した私の神聖武器を以前交換していた友人も意思決定部メンバーであり続けているから、私の提案は敬意をかなり払われて通り易い。しかし、自分の意見に自信は持

ちにくい。直接戦闘で機械や犯罪者を壊すのは得意でやり方を迷ったりしないのに。迷ったら単純に死にかねないから迷わないよう体に染み付いているのもあるだろうが。

この瞬間も、強大な犯罪組織を破壊する切っ掛けになり得ると感じる証人を、首都星の地下のスラムから機関本部へと護衛して連れて来る仕事を誰に任せるか、思いついたメンバーに確信が持てない。

虫系種族が統括する大企業へ、対立する政治家達による攻撃、一部宇宙域への関税の増加法案が国会で通ったこと。それへの反撃の兆候が見られる。だから機関の高位メンバーは皆、本部で待機が求められている。

だからと言って下位メンバー名に、中位への昇格試験の一環としてこの中難度の仕事振っているのか。

これを提案すればまず通るだろう。この下位メンバーが同じ人間種族の若い異性だから気にしているのか。そんなことは、ない。

「証人を護衛してくることを、この下位メンバーに課しては」

さっさと終わらせて次の議題に移ろう。チカラに身を任せて仕事もこなせばいいのに。仕事をするのにチカラには頼っているけど、完全に身を任せられはしない…今の所は。

出来るように修行しても、友人のように意思決定部の一時メンバーから生涯参加メンバーに変わらない限り、直ぐ意味をなくす。やめどころ。

## ダブル・ライトセーバー 前

「行方不明、ですか」

意外、とまではいかないな。

「そうじゃ。『クワイーガン』にも伝える」

消えた証人、下位メンバー、高位メンバーを見付けておきたい：優先は下位メンバーか。彼女の師は無事で恐らく共にいる彼女も無事だろうが、証人は罪人な上に無事は期待できない、か。

最高位メンバーは彼の弟子に搜索を任せる心積もりか。あの青年は下位メンバーの彼女と同じ世代・種族・階級だから面識はある筈。適任だ。

「良い考えかと。意思決定部には諮らないのですか」

「問題にはしたくないでの」

「しかし、彼女の師も本部で見付からない、弟子のもとに向かうなどの干渉しただろうということは、彼女はやや重要な証人を失ったのでしよう。どちらにせよ機関から外すことになりませう」

中位になるまでは正式な機関所属者とは言い切れない扱いだ。

「師の方は心配せんのかね」

なに…

「まさか、場所がスラムとはいえ遅れをとったということですか。高位メンバーの中でも戦闘に長けた者の筈ですが」

小柄な眼前の彼の目を見ようとしたが瞑目している。

「分からぬ。感じ取りにくいのじゃ」

チカラの広範な感覚と知識は最高位メンバーには誰も及ばない…高位メンバーでも危険な状況の可能性もあるなら――

「私が行きましょう」

「国からの要請もある。既に1名の高位メンバーが本部から離れてしまっておるぞ」

機関は国から半ば独立した振る舞いをするのに機関の最高位がそう言うのか。

「国中に散らばる高位メンバー全ては呼び戻せるはずもなかったでしょう、おかしな要請でした」

「…そうかのう。ふむ。お主に任せよう」

「直ぐ戻ります」

軽武装した高速機に乗って行こう。希望込みで4名乗り…機械弄りの広間から持つていくか。

スラムの下層まで降りてきてこれか……証人の体の一部。証人の死……事故に近いな。近くに治安維持機関の監視装置はあるだろうか。中位でもこの過去をチカラで感じ取って下位メンバーの彼女を追うのは難しいだろう、私が来て良かったのかな。分かった事実は全く良いものではないけども。

証人の隠れ家には行かなくていいな。あの犯罪組織の追及は別の方法が必要になった。

驚いたな……高位メンバーがまた死んだ。……いや殺されたのか……微妙だな。下位メンバーの彼女が乗って来た軽車両の爆発が原因……近くに悪の側面のチカラも感じるが。過去が読み取りにくい。

スラムの更に下まで彼女は降りて行ったのか。誰かを連れて、誰かに追われた状態で。徒歩で移動しているようだからそろそろ追いつくだろう。……携帯端末はどうしたのだろう。高位メンバーであった師の方は危機に直前まで気付かなかったとして、彼女の方は失ったのだろう。強奪されたか、破壊されたか。……単に落とした、それはないか。彼女が連れているのは……人間の男……強いチカラは感じない上に、そもそもの目的だつ

た証人とはまるで違うし彼女もそれは分かる筈だ。

追っているのはチカラの悪の側面を扱っている。危険過ぎて彼女は足手まといを置いて逃げられないのか、現地で協力者を得たのか。さっきの爆発事故現場（事故ではなかった可能性が高くなってきたが）から既に連れていたようだが：

車両では通れない場所を通っていったか。もつと小型車両を持つてくればよかったかな。応援はいいや急いで追いつかないと拙いだろうな。私が急ぐしかないか。

チカラに身を任せて先回りを試すか。彼女は本部に向かいたいだろう、最低でも通信を望む。やはりどこかで上がってくる。その地点にチカラが導いてくれれば、危険な追跡者より前に合流できるはずだ。

不安定なチカラ、チカラ同士が衝突してる。チカラとの繋がりを隠し悪の側面の使い手から感知されないようにする。

間に合わなかったのか。まだ間に合うか  
気付かれたか。

チカラを用いた強化がないから分からないが、高速機でチカラを感じた建物の真上まで一直線に飛ぶ。

こここの建物の中だろうな――高速機を空中に停車し、飛び降りる。チカラと再び繋がる

扉を高速で通過する――

赤いエネルギー体の刃が彼女の腹を貫いた／下位メンバーの彼女の罨だ、部屋の壁の導管に通る燃料を起爆してあの敵との道連れを狙っている。

チカラで彼女に直接干渉して、罨に気付いて飛び退いた敵に続いて彼女を連れて飛び出していた。

体が痛む、爆風と破片の影響を多少受けたか――

紫の半実体の刃を出して――

赤い刃を柄の両端から出した相手と切りつけ合った。

意識を失った彼女を床に横たえて扱えるチカラを私の全身に巡らせる――

# ダブル・ライトセーバー

## 後

…私の方が分が悪い、だと…背後の彼女を狙う素振りも見せないのに押しつけてくる…なんだこの相手の型…下がるのはマズい――

【残忍】の型を使う。

私の素早さと臂力が増す。突きと肘を畳んだ小さい斬りつけを多用する。左右に動きながら攻撃するのに集中する。

悪の側面のチカラが私の中を通り抜けていく。善の側面のチカラで心は満たされている筈だが、強大な力を振るう高揚感が溢れてくる。

相手の動きは攻撃的なままだが、私は素早さにまかせて攻撃を続ける。攻撃に使った刃と逆側の刃を防御に利用してるのか、機関では誰も使っていない形の神聖武器だから対応しきれない。防御を超えられない、相手の攻撃が苛つく――

消耗が激しいが直ぐには戦闘を終わらせられそうもない。どうする――第六の型の方が【残忍】よりも得意と言えるかも、いや第三の型で防御を主体にして所々挟む反撃で相手を殺せるのを期待するか。

…【残忍】が最も強力な選択な局面だ。この動きを維持できなきや私の方が死ぬな。

もし、同条件で戦闘を始めていても私の方がやや分が悪い、のか。

後ろの彼女も重傷だし2人とも死にそう…

彼女を見習って相討ちを狙うか。全員死ねばいいってか――

全力でチカラで敵に直接干渉、押しつける。思った通りに全然距離取れてないけど、一瞬の余裕があればいいだけだ。

神聖武器から右手を離し、腰のベルトの留め金からもう一本の神聖武器の柄を外して掴む。

スイツチを入れてエネルギー体の緑の刃を出す。こっちの方が出力が高いが熱を抑えきれず使うと刃に近い部分が火傷するんだがもう死ぬんだし…痛いのも死んで消えるのも嫌だなあ…

熱い。暑い。右手が焼けるし汗で服の背中と両脇は濡れてるし、気持ち良く死ねないな。

相手が少し離れた所で止まってる。

薄暗いが相手の動きはチカラを通して明確に感じられる。

なら構えさせてもらう。

両腕を脱力して紫と緑の刃を両側斜め下に緩く広げる。【残忍】というより【合成】の派生か【強猛】に近い構えだけど、遣うのは【残忍】だ。

同時に十も二十も刺突と斬撃を繰り出す自分を想像する。私の行動をチカラで高精度で数瞬先まで予測できるに違いない相手だからこそ、この想像は実現可能だ。実際には同時には2回しか攻撃できないんだけど。

【残忍】の応用で、目の前の敵が発する激しいチカラを受け流すだけでなく、自身と神聖武器の強化に利用してみる。

：肉体的な全盛期は過ぎていているけど、最新鋭の重武装した高速戦闘機を操縦した状態よりも今の方が強いかも。

即座に興奮の抑えが効かなくなってきた。

相手に向かって飛び込む――

赤い半実体の刃が両端から飛び出す柄が回され――

悪の側面のチカラが爆発した。

吹き飛ばされながら、赤い肌に黒い入れ墨といくつも小さい角がある相手の後頭部が見える――

両足で着地する。居ない。

チカラの強化を感覚に傾ける。感じ取れない。

逃げた、いや一時的に退いた、奇襲してくるつもりだろうか。

床も近くの建物も大きな罅が入っているし爆発があった建物の階は崩れてもおかし

くはない、彼女を運んでさっさと離れるか。近辺に他に生命は感じないが…敵がまだ潜んで様子を窺っているかもしれないし。

記録にあったチカラによる高度な治療ができればな…血管をチカラで押さえて出血は止められるが、治療装置に直ぐに入れても彼女が助かるか微妙だな…

というか私も怪我してるし。本部に通信しないと。

乗ってきた高速機が壊されてないといいが、この女性は助かるだろうか…